

『奇驚滑稽浮世廼迷惑』書キ付ケ

池田一彦

明治初年、反文明開化主義を標榜して数多の世相諷刺戯作——例えば明治六、七年刊の『当世利口女』『近世あきれ墓』等——に氣を吐いた万亭応賀の戯作本は、その多くが半紙本サイズ、和装・木版の仮綴じ本であったが、その数年後、明治十年代半ばからは菊亭静（高瀬真卿）辺りがやはり世相を鋭く穿った滑稽諷刺の戯作本をいろいろと手がけていて、これは中本サイズ、洋装・活版の仮製本のものと同ボール表紙本とあった。菊亭静の著作は、明治十六年に最も多く刊行されているのだが、例えば『新奇闇魔大王判決録』や『滑稽明治流行嘘八百』（それぞれ二冊物）等は仮製本だったし（それぞれ後にボール表紙本化されている）、『滑稽書生肝粒誌』や『明治抱腹奇談』等はボール表紙本であった（こちらはそれぞれ後に小ぶりて極薄の冊子体

裁で仮製本化されている）。この時期、正確には明治十五年だが、滑稽戯作でボール表紙のものには、他に大久保夢遊の『文明地獄極楽一周記』があつて、ただし、これには仮製本のものも同時に行われた模様である。これを要するに、こと菊亭静や大久保夢遊に寄つて見れば、明治十五年頃の滑稽諷刺の戯作本には、仮製本仕立てのものと同ボール表紙本仕立てのものと混在している趣だが、知られるように文学書類・小説関係のボール表紙本というのは、明治二十年前後に圧倒的なピークを迎えるので、明治十七、八年頃には小説類など和本とボール表紙本とが並行して行われていたという事情もあるが、明治十五、六年の菊亭静等の「滑稽」を旨とした戯作のボール表紙本（ちなみ

にこれらはいずれも文字表紙であった）は少々時代に先駆

けた感がある。明治の一年は、想像以上に濃密である。而して、明治十年代からの世相を諷刺したものには総じて複製本仕立てのものが多かったと言つてよからうと思われ

る。

そのような趨勢の中で、今ここに取り上げる前田時三の『滑稽浮世廻迷惑』はやや異色である。明治十二年十月の「序」を有する明治十三年三月発行の世相諷刺ものであるにも拘わらず歴とした（文字表紙ではない）絵表紙のボール表紙本として出ている、書名中に「滑稽」を謳いながら極めて実用書性格の強い、と言つて首尾結構その他に緩みの窺える、過渡期的と言えば過渡期的な作物で、或る意味奇天烈の書だ。明治十二、三年すなわち明治十年代初頭の出版物として珍しいものかと思うので、以下これについて少しく書き付けてみるでしょう。

先ずは簡単な書誌的事項を記す。ボール表紙本。縦十八cm×横十三・三cm。薄い青灰色地の表紙は枠付き、木版の戲画上部二段に書名『滑稽浮世廻迷惑』とだけあつて、著者名・出版社名等は掲げない。扉は表紙の枠内をそのまま、目次無し。四号活字で一頁縦に十九字（二十字の箇所も有り）が九行。本文のみ多目のパラルビ。句点を用い

ず、読点は一マス分取らない組みである。「緒言」二頁、本文（第一章「迷惑總論」、第二章「交際の迷惑」、第三章「商法の迷惑」から成る）三十四頁、奥付一頁、挿絵は本文中に見開きのものを含めて八頁。広告頁等は無い。本文はルビを主として誤字脱字すこぶる多い。

奥付を摘記すると、「明治十二年十月廿九日御届 全十三年三月発行（定価金卅五銭）」とあり、「著述人」は「大坂府平民 前田時三 西区阿波堀通七番地」、「出版人」が「大坂府平民 前川源七郎 東区北久宝寺町四丁目十八番地」、「弘通」として「東京通三丁目 小林鉄治郎 大坂堂島中通 静雲堂」と見える。出版社は「軍談小説種史類板元 前川文栄閣」である。

なお、本書名についてだが、「奇驚滑稽」の四字は、表紙に横書きで「浮世廻迷惑」の上に小さく冠されているのみで、内題・尾題共に「浮世廻迷惑」とあるばかりだが、角書と判断し、本稿では『滑稽浮世廻迷惑』と表記した。国立国会図書館には「浮世の迷惑」と登録されており、天理大学附属天理図書館と早稲田大学図書館が一本を所蔵する。

「緒言」がよく本書の性格を表しているのでこれを引く

明治十二年十月廿九日御届
 全 十三年三月 發行 定價金卅五銭

著述人 大坂府平民 前田時三
 西區阿波堀通七番地

出版人 大坂府平民 川源七郎
 東區北袋寺町四丁目十八番地
 通三丁目 小林鐵治郎

通 大坂堂島中通 靜雲堂

此外各國書肆諸新聞賣所繪草紙屋等。差出有之候間御最寄御
 手近。御購求。乞。 寫談小説舞史類板元 前川文榮 關

図2 奥付



図1 表紙

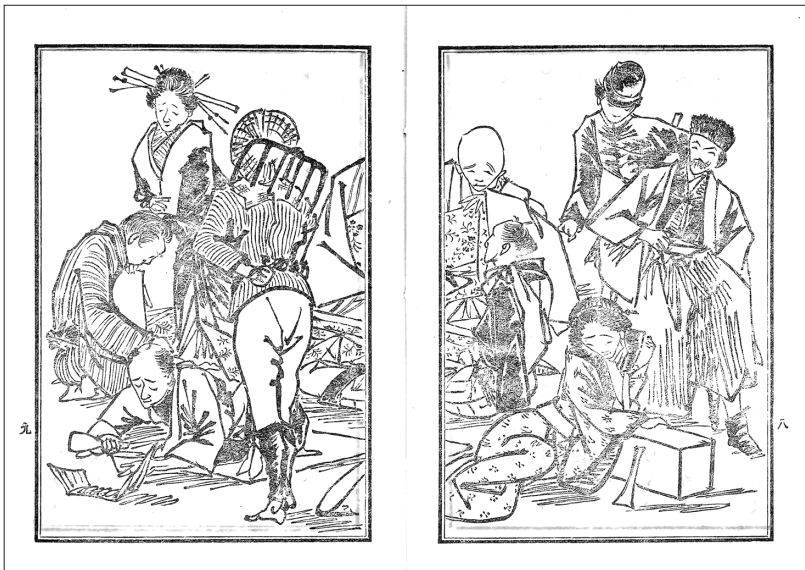


図3 迷惑参集の図

(原文ルビ無し)。

凡学問に死活の別あり古の書を萬巻読むとも今日の便
とならされは是則死学問と云ふ又今の書を一葉読とも
日用に益すること有れハ是則活学問と称へざるを得ん
然り而して各人に賢愚あり其位に尊卑あり学たるに浅
博あり此書は愚なる卑しき浅学者の為に編たるなれば
滑稽を主とす然れとも其実有益なること少なからされ
は看者世の洒落本の如く通読せず深く其意を考へ死学
問と為さす益することのあれば著者の老婆心も全く贅
瘤にはあらざらんと爾云

明治十二年

十月念三日

著者 識

福沢諭吉の『学問のすすめ』(全十七編 明治五年二月
→明治九年十一月)の強い影響下にあるもので、「今日の
便」となり「日用に益する」専ら(実用の学(問))を志
向している。その意味では、すぐ後の本文に「前田時三戯
著」(傍点筆者)と記された戯作本であることは確かだが、
本書、内容的には実用の書だ。書名に「奇驚滑稽」と付

く、その「滑稽」に関して「愚なる卑しき浅学者の為に
編」んだから「滑稽を主とす」というのも、面白い。手
段としての滑稽。それを初めから明言している訳で、実用
的な教訓を旨とする滑稽仕立ての著作物、と先ずは捉えて
よいらしい。「世の洒落本」とは別格だと、若干高飛車な
(?) 戯作なのである。

第一章の「迷惑總論」から見に行こう。本文十二頁、挿
絵が二頁。

「凡そ人の浮世に住居せは、是非迷惑と申事ハあるもの
にて、」との書き出しで、身近な「火災」など「近処の迷
惑」や「門違」の迷惑、「風雨雷等の迷惑」から説き出だ
す。もともと「火災、洪水、飢饉、夭死、疾病等」(ルビ
の()内「わ」や「い」は消えているのを筆者が補つ
た。以下同じ)の迷惑は「造化主」の然らしむるもの、
「時世の変遷」で迷惑とは称え難い、と言う。「總て迷惑は
他より受る者多く」して「上は人民の頑固」なのに迷惑
し、として「下」は「毛唐人の桀紂」「仏国路易」を例に
次のように述べている(ルビの不統一・誤記等は原文のま
ま、以下同じ)。

残忍無道の政事を行ひ、人民の膏血を絞ること、榨木を以て種油を絞るか如く、且人民の權利を抑圧すること、鎮石を以て沢庵を圧するか如く「オット」斯う六箇敷陳文漢語混りて説だしてハ残学者か見て迷惑依へ是を俗語云と夏桀王、殷紂王、又ハ仏蘭斯の路易と云る王が、日々酒と色とに淫れ、政事は心意にもかけず、唯人民の汗水滴して働き出したる金を取上げ、(中略) 苛酷王の世に住し人民の迷惑ハ古今無双の飛切にして難儀の親玉なり然し我邦に於ては如此例少し殊に方今ハ人民を愛育し学校を設けて児童を教導し警察局を設けて人民を保護し或は司法或ハ地方官等を設けられしも皆な人民に迷惑なからしめんが為なり

そして、「其深き五主意を知らず」、学校、税の取り立て、「紙幣」の増刷、「土木の當繕」、「警察官」「地方官」を迷惑がって文句を言う輩は「人民の我身勝手」で、これは「真の迷惑」と言うものではない、と論ずる。では、著者の言う「真の迷惑」とは何か。

真の迷惑たる者は「オット」是ハ能く調べて述べ、間違てハ於此を蒙り、著者も書林も迷惑故、遅々後より申上舛、先つ此場所ハ總論のことゆへ、其理由たけ、右の如く迷惑の種類多くして、交際の迷惑、商法の迷惑、有難迷惑、我儘迷惑、不勝手なる迷惑、内情の迷惑等(下巻に委しく)の類は皆な我身勝手の悪しきより稱ふる迷惑にして、言ふには言へず、陰にて公然と膨類く小言の意に通ず、

先に政府寄りの姿勢を示し、その「深き五主意」を讃え「人民の我身勝手」を論じていたので、「真の迷惑」論で何が出るのかと思いきや「オット」是ハ能く調べて述べんと云々と官憲や出版条例を気にかけてような文言で躲される。高飛車、一転して、弱腰となる。愛嬌と言えは愛嬌だ。「迷惑總論」として予告される本書の内容は、と見れば、「交際の迷惑、商法の迷惑」までは具体的な感じも有つて、實際この先それぞれ章を成しもあるのだが、「有難迷惑」以下四つの迷惑は余りに茫漠として、少し厳し目に言つてしまえば「言葉遊び」の域を出ない。具体性に欠けているので予想もつかず、すぐ続く「下巻に委しく」の信憑性たるや

……甚だ低い。本書が「上巻」との断りも全く無いまま、ここの「下巻」云々ははじめから怪しいのである（実際出ていない）。

続いて、人に「邪推しよすいされ」たり、「妬ねたまれ」たり、人の「誤察あやまり」によって受ける「一時我身の災難」という迷惑もあるが、これは「常々の品行正しく」するのが大事とする。「自ら迷ふて惑もの」と「迷されて惑もの」いずれもその「多寡たか」によっては「国家の存亡人民の安危」に関わるので、「君臣、父子、夫婦、兄弟、姉妹、親類、朋友、権兵衛、太郎兵衛、熊公、八公、阿三、権助」みな「互に迷惑の寡すくななることに工夫」して人に迷惑をかけなければ、人から迷惑を蒙ることも又無いだろう、日本国中三千万万人みんなとは言わないまでも、本書を読んだ人々には有益、「決して損害になること無は印紙貼用して保証すべし」と「迷惑總論」は閉じられる。

正論、のようである。人みなが人に迷惑をかけないよう工夫すれば、人から迷惑を蒙ることも無かろう——著者は、本章末尾で「諺ことわざ云人の患を察すれば、人又己の憂を助け、同気相求め、同病相憐む、寧丸の平均も相持とかの如く」と諺を立て連ね、持説を補強もしている——、心

情的には理解できなくもない言い様ながら、ややお目出たい考えだ。「迷惑」の一番厄介なところは、それが一方に非が無くとも唐突に災難然として一方（向）的に降りかかって来ることが応々にして有るといふ現実的な一点だ。しかし、その点には「迷惑總論」、惜しい哉一切触れられていない。「我身勝手」の迷惑、と何もかも自分の責めに収めなくとも良さそうな気がするのは、それこそ責任逃れの「身勝手」な言い分か。

第二章「交際の迷惑」に移る。本文十一頁。

世間一般の「交際」すなわち付き合い上の迷惑を羅列、取り沙汰している。

「交際上に於て迷惑の隊長は、俗に蛇の生殺と称る人物にして、飯前より来りて早正午の砲声も過ぎたるに帰らざる故、」云々と語り出される、世に言う長つ尻が先ずは挙げられる。

壁に耳ある譬を弁へす彼蕩郎は先で徴役にでもなるで有ふの彼淫娘は地獄にでもなるの隣の硝燈頭親爺は悋粟の向の撓舌婆々ハ囁しるの彼寡婦ハ密夫かあるの彼鰥夫は身代限をするの、何の彼と無かりもせん、人

の讒謗をなし、大声にて上の小言を云ひ列へらる、
ハ、実に傍人の迷惑なり

いわゆる（傍迷惑）というやつ。

続けて、飲食も一段落かという時分に凶らず「汁粉餅」
を「一碗」で終わらず「強て二碗を勧めらる、」迷惑、
「仏事又ハ祝賀にて、客を招き、廻章の時刻より漸後れて
来らる、」迷惑（これは「尤も断りなく約に背くは、尚更
迷惑」と追記アリ）、さらに「生意なる書生が欧語を知ら
顔して、話しの中に混ぜ、又た生開化めかして、偏言漢語
を遣る、」迷惑、「細君の於追従と、阿世辞の過る」迷惑、
元「士族」が同じ「裏店」の住人を「素平民」と侮つたよ
うな長屋での迷惑、早朝外出時に「来客」の迷惑、「止む
を得ず友人に登楼を誘れる」迷惑……等々「皆交際の迷
惑なり」と述べられている。

面白い(?)のは、右に続くこの章の終盤、以下のよう
にある。

其他酒臭き又ハ生魚臭き茶碗にて茶を出さる等も、実
に迷惑なり爰に余輩か、迷惑せし実地のことを述べ

ん、当夏或宅を訪らひしか折良く主人在宿にて一間へ
通し、暫時すると、下婢は、敬しく茶卓に茶を載て来
り「余輩の前と」「主人の前と」に置いて次の間へ去り
又、偕余輩ハ茶碗を、押し載き既に喰んとせしが、こ
は如何に番附の香に腐敗れたる塵埃の香を混したると
言ふか、肥物屋の香に火葬場の煙香を雑せたと云ふ
か、何とも如とも鼻柱を削去らる、心持なれと、

要するに「茶鉢」が「夜前の儘」で暑中のこととて「蒸
た」のだということであった。「爰に余輩か、迷惑せし実
地のこと」を延々四頁割いて書き連ねているのが面白い。
本書中、ここだけ自己の体験談なのも、妙な鍵括弧が突如
出てくるのも、浮いた感じは否めない。言わば変調だ。た
だ、結びは「依て夏日には決して前夜に出したる茶を再び
於出しなさらぬ様若し御疑ひの方々あれハ一応お試験ある
へし随分臭きものなり」と明治十年代当時の小新聞の投書
めいた書き様になっていて、本書の実用（書）的性格をよ
く物語っていると云えよう。南新二をはじめとして、明治
十年代の小新聞への投書には、よくこうした生活に根差し
た、言わば（生活の知恵）とでもいった趣の提言が掲げら

れたものだ。文章の滑稽味と実用性を兼ね備えた、それら小新聞の投書的な話柄に単行本の一章の結末が落ち着くのが興味深い。「交際の迷惑」をあれこれ論じて、急転直下、著者の一体験とそこから得られた一件の教訓……、意想外の展開と言つてよからう。ここには、単行本と新聞・雑誌という媒体の差異がほとんど見受けられない。単行本という形態の有する独特の（時事的話題からの独立性）という観点から、本書第二章の仕舞い方はかなり異色なのである。而して、それが本章最大の特徴でもありと認められる。

第三章は、「商法の迷惑」。本文十一頁、挿絵が六頁である。

「夫れ商法ハ品を以て物に易へ、貨幣を以て品を買ひ、貨幣を取て物を売り其れの算段を以て其の目論見を為し、」云々との書き出しで、その「世間の融通国家の繁栄」上の有益さを説き、「迷惑の寡き」ものと評しつつ、一方で、「時々損失を見込みて法外の安売をして他の業を奪取らん」としたり、「似類の名を附けて固有の名譽を害し、人の繁昌を妨げん」としたりするもの等を「商法上の迷惑」とする。

甚しきハ、官吏を抱込て私に言込み、或は鼻薬を播散（現今は才受の官吏も無けれど）市権を握るの奸計を行ふ等は、皆な人の迷惑にして營業の寇敵なり斯様なる者は、面皮を剥き膽珠を叩潰して、厳しく其戒をなしてもよき者なり

相変わらず「官吏」には優しい著者だが、このところ威勢がいい。

さて、以上を「商賈一般の迷惑」として、個々別々の「商」と「業」とについて悉くその「迷惑」を述べ立てるのは甚だ難しいと言う。昔と今とで、その在り様が大いに変わったからである。以下、昔の話に入る。士農工商の時代は、商う者は「商」と「賈」の区別があつたのみであるとする。その他は……、著者は職業別に八つの「民」に分けている。

野郎傾城河原者女街三味線彈歌舞妓淨瑠璃語の類是
を淫戲の民とし、能役者、茶湯者立花師、琴彈蹴鞠
尺八碁抄、将棊差、誹徊師、軍書読、角力の類、是

を優游玩弄の民とし、巫女人相見、修験者の類、是を呪術の民とし、穢多烟凶、乞食の類、是を窮醜の民とし、座頭、瞽者の類、是を痼疾の哀民とし、髮結雲介馬喰、日備船頭、馬卒、の類、是を賤役の民とし、入目、入歯師、骨接、按摩、針外科、女男、医者の類、是を技術の民とし、詣寺社家の類、是を宗広祠堂守衛の民とし、右等昔時は人より恵れ、或は謝礼を受ける者にして商賈の外物なりしか

明治の今たるや、芸妓、娼妓、俳優等みな「商業」ならざるは無く、「昔有て今無きもの有り、昔無き者の今新に有り、或は同じ者にして昔と今と名称の異ふ者あり」だが、みな「商法」となっている、とする。「穢多」も「新平民」となり、「烟凶」が「八弘社」、「乞食」の「籠附木売の賈」となったように「方今に於て萬民商ならざるはなし」(奉職の人を除の他)という訳だ。

で、「耕者」「千金丹」「金時豆」「紙屑無カ子」(原文「紙屑無カ子」ハ屑を売り「オツイ」買ひ、或ハ硝燈火屋の破壊を買ひ)とあつて、いわゆる屑屋のことだけれども「オツイ」は「オット」の誤植か、いずれにしても本

書、冒頭にも触れた通り誤字脱字の類は滅茶苦茶多い)どこにも「売買」の行われる中で、「迷惑」は生ずるもの、「多寡の別」あるのみだと断じて言う。

依而先つ多なるものより説かん(然し余輩の知りし者なる故其より多き者あれハ後より探偵の上)

娼妓

抑娼妓ハ何れ両親の迷惑を救ふ為め身を苦界に沈める者か或ハ我儘なる迷惑の重りて浮川竹に身を入るか、何か迷惑より出る者なり、鳥渡中言ながら申上舛、此娼妓なる者ハ甚た称への多くあるものにして、時々他国に於て其解せざるの迷惑なることあれば一二葉の紙を無き者にして記す

以下、三頁と三行に亘つて「娼妓」の異名の考証ならびに日本全国土地別の異名一覽となつて、突然「浮世の迷惑初篇終」と来るのである。前半を書き付けて置く。

○遊君○傾城○戲女○一夜妻○朝妻○うかれ女○くつ女○辻君○女郎○湯女○比丘尼○飯盛○踊子等ハ



図5 娼妓の図(2)



図4 娼妓の図(1)

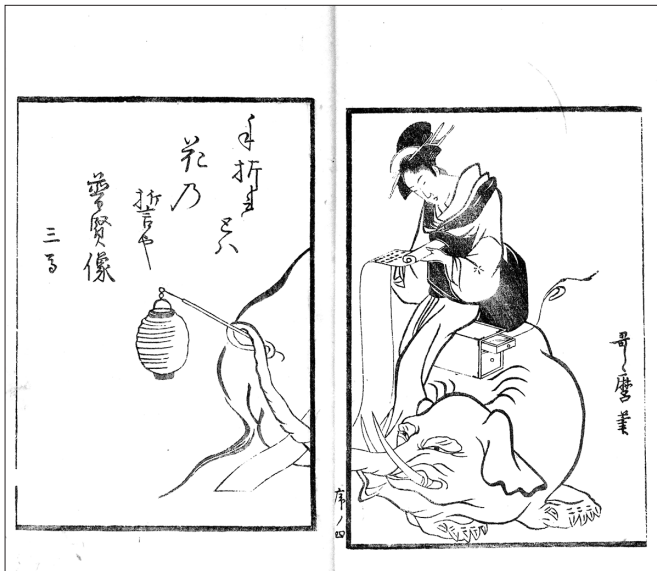


図6 式亭三馬『辰巳婦言』挿絵(宮崎修多氏蔵)

よく書にもありて、各国普通の語にして何の国にても通語すれと、大坂に云ふ、天神、まんた、そうか、ひんしよ、ひめ杯と、上中下に語を分け大坂に限る言葉なれハ他国にて通ぬことあり又太夫、白裾幻妻の言葉、大坂にて称ふれとも他国にも此言葉あり太夫は西京島原の通語にして、白裾は福岡に称へ、幻妻を紀州に言ふか如く、彼国と此国の同称あれと其主なる所の国名を記す

ちなみに「娼妓」の異名として挙げられたのは、三府が七、東海道が十一、東山道が九、北陸道が六、山陰道が二、山陽道も二、南海道も二、西海道が五、北海道が十二の語であった。

かくて、第三章「商法の迷惑」は、商法・商業の意義に始まり、「商賈一般」の迷惑を説き、各種商業の迷惑に及ばんとしつつも、今昔の職業名の列挙とその何の「民」たるかの分類に流れ、流れた挙句が「娼妓」に辿り着き、その異名の紹介・一覽で幕を閉じる、という書名に恥じない「奇驚」な構成を呈している。首尾の照応だの、確固とした構成意識といった今の世にありふれた軌範に一切囚われ

ない、正に闊達自在な筆遣いの妙境に達していると評することが出来そうだ。先に「下巻」と称していたものが、突如「初篇」で「終」と来るのも意表をういて面白い。そんな第三章なのであった。

『奇驚浮世廻迷惑』の内容について見られるところ、ざつと以上の如し。

著作者・前田時三についても、挿絵画工についても、残念ながら詳しいことは分からない。だが、奥付の「著述人」「出版人」共に「大坂府平民」となっていることから、明治初期の大阪発信の著作物ということが知れる。極めて細かい点で、第三章の「乞食」転じて「簞附木売の賈」となったとあるところ、「附木」のルビに「いをん」と振るのなどは、やはり上方風である（昭和十三年五月発行の柳田國男『木綿以前の事』中「火吹竹のことなど」に「今ある附木は上方では一般にイランと謂つて居る」と見えてる）。「娼妓」についての異名紹介でも、大阪中心に述べていた。なので、本稿冒頭に「奇天烈の書」と言つたは、よりの確にはこれも大阪風に「けつたいな書」と言い直して可であろう。

同じく冒頭に、明治初年に万亭応賀を、明治十年代半ば

に菊亭静を仮に世相諷刺の戯作本の代表として置いたが、明治十年代前半は、この書の他にも、例えば香雪居士戯著『人の了簡違』（著者兼出版人 大阪府平民 天野皎）明治十二年四月一日、次篇は六月十一日出版御届 砂目石版絵表紙のボール表紙本）や石井俊郎編『滑稽開花の寐言』（編輯人 京都府士族 石井俊郎）「出版人 大阪東区平野町五丁目八番地 石井和助」「発兌人 京都寺町松原下 今井喜兵衛」明治十三年一月十六日出版御届 同年二月刻成木版和本）、加藤富三郎編輯『（氣に当時悪口 喰ぬ）一名心得違者説論』（編輯出版兼 大坂府平民 加藤富三郎）明治十三年一月廿日御届 同年四月草稿検査済 金随堂 仮製本）、南風道人閔・酒吞堂誌口述『（滑稽 演舌）不思議の世の中』（編輯者 京都府平民 池部活三）明治十四年五月十日出版御届 興文社 仮製本）等の世相諷刺ものが有って（期せずしてどれも関西圏の著者・編者による出版物だ）、それぞれ注目に値するものであるが、〈けったいさ〉において本書は突出している。見て来たように全体として、内容・表記面での未成熟さは覆うべくもないが、明治十二、三年当時の世相を〈迷惑〉の視点で捉えた、否、捉えようとした、これも一箇の意欲作と私は認めるものである。

最後に図版について一言添えておこう。表紙・奥付・挿絵を載せたが、寝そべった象の上に遊女、手紙がだらりと垂れ下がっている絵柄——〈象に乗った遊女〉の題材では勝川春章の肉筆画「見立江口の君図」（ボストン美術館蔵）等数多くのものがあるが、ここでは一例として、類似した構成を有する式亭三馬の洒落本『（石場辰巳婦言）』（寛政十年）の喜多川歌麿のものを併せ載せてみた。象の鼻先の提灯こそ無くなっているものの、『（滑稽）浮世廻迷惑』の方、こちらはこちらで可愛らしく描かれている。瀟洒な本書にうつつけである。「緒言」に「世の洒落本の如く通読せず」云々とあつたに拘わらず、初篇とは言い条、本書の終わりが「娼妓」で挿絵がまた洒落本に通ずる風なものも、何か愛嬌が感ぜられて素敵に楽しいものと言えまいか。

『（奇警）浮世廻迷惑』、なかなか味わい深い一冊なのである。
〔付記〕本稿末尾に触れた『（石場）辰巳婦言』については、宮崎修多氏のご教示と原本の貸与を得ました。記して謝意を表します。

なお、文中に今日の人権意識に照らして不適切の語があるが、資料の歴史性を考慮して敢えてそのままとした。

(本稿は成城大学特別研究助成による研究成果の一部である。)

(完)